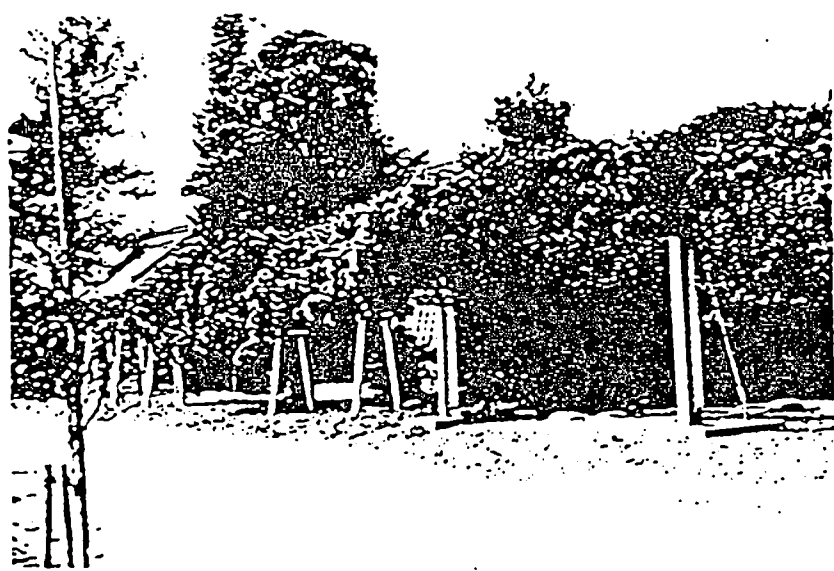


平成三年七月二十四日 (水) 郷土研究会資料

第一八四回 虫跡めぐり

古利根水濁敷策と川崎の虫追い見学



越谷市郷土研究会

第一八四回 史跡めぐり案内

行先 古利根水郷と虫追いの川崎神社

日時 平成三年七月二十四日 (水)

集合 北越谷駅東口 午後四時

コース 北越谷駅(バス) → 松伏可役場前下車 → 宝珠院 → 静栖寺

→ 古利根川畔散策 → 北川崎 → 聖徳寺 → 大松 → 清浄院 → 川

崎神社(県選択無形民俗文化財・虫追い見学) → 堂面橋

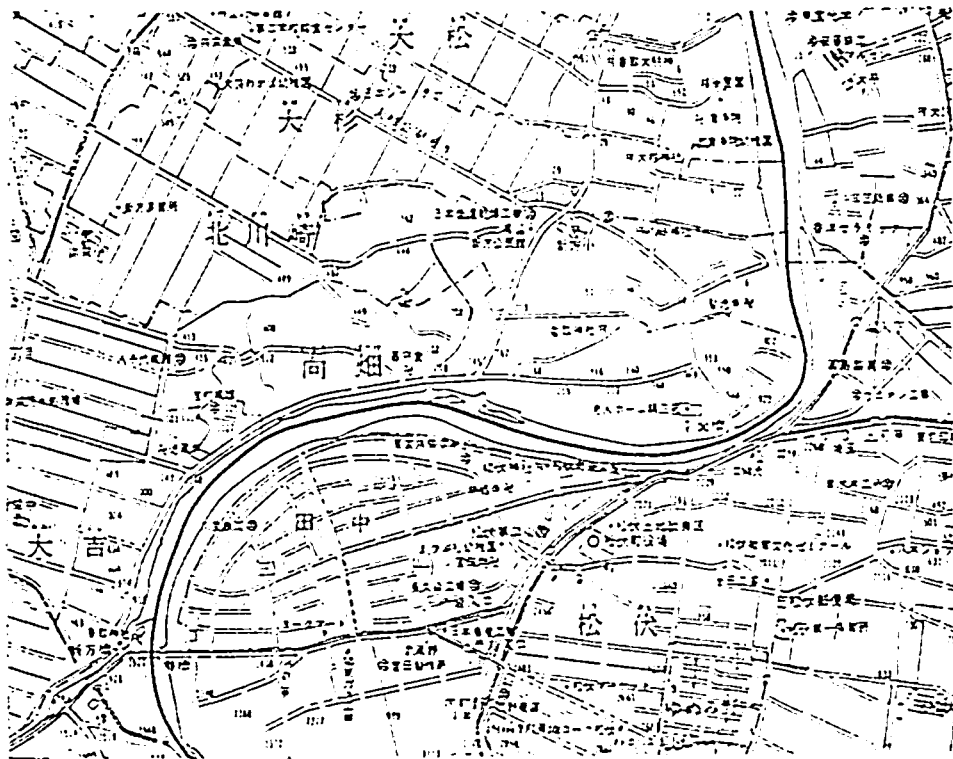
(山崎商店前)バス停 → 北越谷駅

参加費 一〇〇〇円(交通費、資料代他含む)

案内者 理事 鈴木秀俊

主催 越谷市郷土研究会

(史跡めぐり地図)



〔大落古利根川〕

越谷市の東境を流れる古利根川は、江戸時代初期の大改修以前の旧利根川の下流部にあたる流路で、排水路としての役目が大きいのでこの名がある。

羽生市川俣から加須市を経て鷲宮町に至る間は、昔の名称で会の川と呼ばれる。これより下流越谷市付近の中川（庄内古川）との合流点までを古利根川といい、さらに下流は今では中川と呼んでいる。旧利根川はこの河道を流れ、さらに入間川（現在の荒川）を合わせて東京湾に注いでいた。

江戸を水害から守るため、幕府の命をうけた伊奈忠治・忠克親子が利根川の流路を、渡良瀬川から更に鬼怒川に結びつける大工事を進めた結果、承応三年（一六五四）現在の利根川の河道ができた。それと同時に、古利根川も現在の河道の名称となった。今では県東部低地の水田地帯を流れる幹線排水路として、大小の排水路を併せて、八潮市東部から東京都に入り、東京湾に注いでいる。

飯沼には、久喜市大宇吉羽宇下河原（右岸）より、中川への合流点までの二六・七キロを大落古利根川と呼ぶ。

〔松伏溜井〕

葛飾郡松伏村（松伏町）と埼玉郡大吉村（現越谷市）の間の古利根川に設けられた葛西用水筋の溜井。

寛永六年（一六二九）荒川の入間川筋の瀬替えに伴い、埼玉郡南部地域の用水確保のため、庄内川から引水した中島用水を松伏で堰留め、葛西用水（現越谷市・逆川）を開発して瓦曾根溜井に導水したのが始まりである。当時、松伏溜井から引水した用水は、松伏溜井からそのまま直流される葛西用水（逆川）と、堰をもち、流される二郷半額本田用水・新田用水の三筋があったが、享保十五年（一七三〇）さらに東葛西額上下割用水が松伏

溜井から引かれた。当時の松伏遷見回り役は、松伏村の石川民部、増林村の榎本熊蔵らが勤めていた。

〔宝珠院〕

新義真言宗、埼玉郡末田村金剛院末、松花山多聞寺と稱す、本尊阿弥陀如来。当寺元毘沙門堂領三石の御朱印を賜り堂も別にありしが、寛政年中回禄（火災）にかかりし後未だ再造に及ばず、因て仮に本堂に安ず。

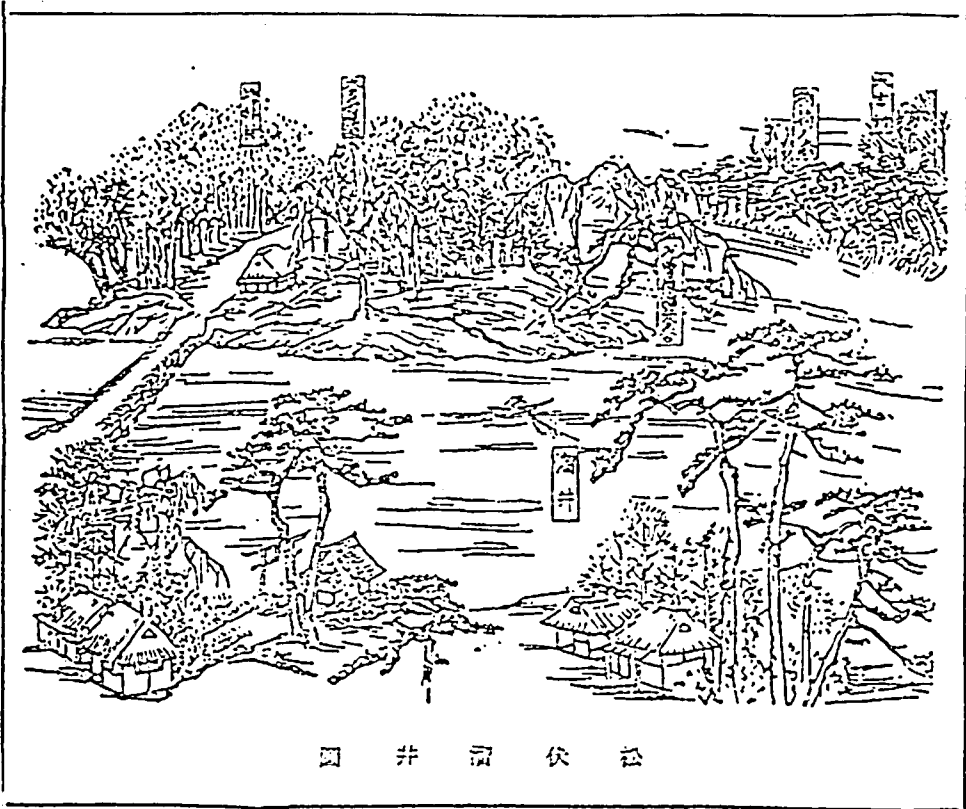
中興開山永秀、元禄五年八月五日寂す。（風土記）

〔静栖寺〕

新義真言宗、京都仁和寺末にて同所摩尼珠院より兼帶す、定水山壽量院と稱す、本尊阿弥陀は恵心の作なり。

元和九年明海上人草創す、上人は正保三年六月二十七日寂。開基は村民民部が先祖、法名道忠、当寺を開基し、父の法名静栖をもて寺号とせり。それよりこの辺二十一ヶ寺を開基し、延宝四年六月二十四日死す。

※石川民部家の墓所「石塔群」は、町指定有形文化財となっている。



松 伏 溜 井 園

（新編武蔵風土記稿より）

石川翁助 祖光石川民部宗道は石川家の末法にして武功の士と
 りしか深く仏法に帰依し天正年中終に武を棄て民間
 に下り居を本村に卜し開盤に従事す中この鈴木と改姓す慶長十
 三年二月二日死す法名香林道徳僧士と号す宗道家を嗣ぎ父の遺
 教を守り仏法を尊崇し村内祖徳院を修理し尙再造を謀りて果さ
 す寛永九年九月二十二日死す法名泰法常濟僧士と号す宗正家を
 継ぎ本姓石川に復す宗正資性頼政にして力行徳ます力を開盤に
 用る近郷は防なく遠くは北総民部新田三州民部山等を開き高は
 一万石に余り町は千町歩に余る奴婢三百余人を有するに至れり
 而して又能く財を散し施を好み兄弟等に田宅を分ち新に家をな
 すもの三軒あり又亡父の遺志を継ぎ祖徳院を改造し多くの田畑
 を寄附し沙門衆宗を住職とし仁和寺の直末となす法親王之を好
 し旧号を除き幸直の法名をとり号を静照寺と賜ふ宗正感喜に堪
 へず門末二十三等を建て各田畑若干を附す万治三年又一品法親

〔聖徳寺〕

浄土宗、本尊阿弥陀如来、

祖神聖徳太子靈堂来由縁起

「当山は太子山聖徳寺と号し、慶長年間学徳兼備の観音源翁上人の開基にして、師は夙に太子奉賛の念厚く、
 念仏弘通の傍ら、当時未開の関八州に太子の聖徳を宣布巡教、各地に太子講を結ばしめ、晩年終をこの地
 に止む、人呼んで太子講発祥の靈場とす」

とくに建築業関係者の崇敬あつた。

境内のイチヨウの木は市指定天然記念物。樹高約二〇米、幹回り四米、このイチヨウは雄株でギンナンの實を
 結ぶ、樹齡は推定四〇〇年ぐらい、樹勢は旺盛である。

三日光社参の時静照寺へ行啓を請ふ法親三幸正の功勞を賞して
 絹の袈裟を賜ふ延宝四年六月四日死す年七十三法名興善發山道
 忠とす宗重亦父祖の志を継ぎ天和元年堂宇を修葺し貞享四年
 歳之築き新修の堂宇を落成元禄二年三月死す年六十法名久延
 分外を管み修修に耽るを以て家道大に衰ふ宗政宗重を以て幸孝
 に至る幸孝幼にして父母を亡ひ親戚の保護に頼りて家を継ぐ
 (石川宇右衛門所成石川民部家別にあつ)親理(法名)親治(阿)
 を際高約に至り家の衰微を歎き夙夜勉勵家道稍古に復す又施を
 好み天保七年九月凶秋の時村内窮民へ米三石を施し八年三月又
 五石を施す好豹家を継ぐ世々民部と号せしか繼新の役翁助と改
 む好豹も亦施を好み文久三年三月凶秋の時村内窮民に米十九石
 を恵む明治二年二月七石余四年七月又五石余を施す後松伏学校
 新築費の内へ金二百圓を献し銀壹圓を賜はり御行堤建築費の内
 金百圓を献し亦銀壹圓を賜はる世々宗重を以て郡内に名はる

〔清浄院〕

「新編武蔵風土記稿」に「浄土宗、芝増上寺末、柴広山浄土寺と号す、寺領十二石は慶安元年九月十七日賜ふ、本尊阿彌陀を安ず、立像にて長三尺ばかり恵心の作といえり、開山賢真、宝徳元年（一四四九）七月二十八日示寂す、当寺の東少しばかりを隔て開山塚と言ふあり、そこより掘り出せし古碑に、嘉禄元年（一一二五）の文字見えたり、是起立の人の碑ならんと言ふ」と記されている。

賢真示寂の年について、元禄八年の「開山并由緒」には、「遷化の後、嘉慶元丁卯年（一三八七）七月二十八日遷化、今に於いて七月二十八日末寺寄り合ひ開山忌相勤め申し候事」とある。

「寺号未由」に「応永二十一年（一四一四）春、下総國葛飾郡新方地頭職、向畑城主、新方玄寄允平頼基が大檀那として一山仏閣僧坊を造営された。開山は賢真大和尚である」

明治十年十一月、火災により清浄院焼失。

明治十二年四月、現在の仮本堂建立。

※市指定文化財 木造阿彌陀如来座像 二躯

同 清浄院開山塚

杉浦家の墓

「新編武蔵風土記稿・大川戸村」の項に

旧家者秀怡 杉浦氏なり、三代前より医となり今も医を業とせり、祖元は美濃國竹ヶ鼻城主、杉浦五郎左衛門定元の子、同五郎右衛門定政、慶長五年関ヶ原御陣の時、父定元及び弟祐次郎共に上方勢に一時し、彼竹ヶ鼻に籠城して討死す、五郎右衛門定政は父弟と相別れ、東照宮に奉仕、関ヶ原御合戦御特利の後、下総國船橋村に於て居宅拝領し、高三百石を賜ひ御代官となり、秩父郡内十方石の地を支配せり、然るに慶長十三年村内意富日皇太神宮御再建ありし時、定政の居宅上りし後、当所の陣屋に移り、彼神社御再建惣奉行伊奈備前守忠次、添奉行は則五郎右衛門定政掌り、落成の時賜りしとて御紋の御棗今も珍藏せり、定政は慶長十

八年（一一六三）二月十六日死す。中略

後元文二年（一一七三七）二月、御宮（宅地内）の前土地窪き處より、石室を掘得たり、其内に腐りたる甲冑及び太刀二振朱を以て埋めたり、石室は其のまま埼玉郡新方領大松村清淨院へ改葬し、徳元法師と謚し、其の上に地蔵の碑を立て置しと言ふこと、この家の過去帳に見ゆ、以下略

六ヶ村柴広山由緒書聞書の概略

武州埼玉郡新方の庄大松村、柴広山清淨院の寺号由来。

應永二十一年（一一四一四）春、下総國葛飾郡新方地頭職、向細城主、新方玄誓允平親基が大板那として一山仏閣僧坊を造営された。開山は賢真大和尚である。

上人が住職として異年の後、永享十二年（一一四四〇）將軍足利義教は関東公方足利持氏を攻める、持氏敗れて自害、その遺児春王、安王は結城城にのがれ、結城氏朝の援けをうけて挙兵、寇賊するが、東園勢二十万余の大軍に攻められ、激戦の末、遂に落城した。その折、結城方の勇士野木大炊亮秀俊は晴の最後を逃げたが、その妻は一子松寿丸を抱いて乳母を供に、実家の兄下総葛飾の大川戸（現松伏町大川戸）左衛門の館に落ちのびる。しかし後党侍が既しく、幕府軍が大川戸を攻めるとの噂を聞いた秀俊の妻は、実家や親類まで難が及ぶのを恐れ、わが子松寿丸を抱いて近くの湖に身を投じ、乳母も詭いて後を追う。

その怨靈は、湖に止まり三頭一尾の大蛇と化したので、人々は恐れて寄り付かず、湖辺は荒地となった。文安四年（一一四四七）の春、桜の花見に湖畔を訪れた柴広山住僧賢真上人の前に美女が現れ、跪いて「私は三頭一尾の大蛇にて野木上野亮の妻であるが、結城の人と我が身母子主従を滅ぼした將軍義教への怨は、骨髄に敵して忘れられず、嘉吉元年（一一四四一）赤松（清祐）殿の怨念に頼り、將軍を殺させ、恨を晴らしたが、王者尊貴を弑した罪で湖辺にさまよっている。頼むくば仏の慈悲にすがり成仏したい」上人は、大蛇の悲痛な訴えを聞かれ、文安四年三月二十一日、御堂法会を開いて七ヶ日の大念仏修行をする。二十六日夜半より一山鳴動し、夜が明けて見れば湖は同に変じていた。驚いた人々は蛇塚といひ、

開山塚とも称したという。

文亀四年（一一五〇）四月、八条（三郷市八条）領主八条兵衛尉平惟茂は、兵を率いて新方の地に侵入した。

これを聞いて向畑城主、新方次郎大夫頼希は、直ちに手勢を率い小林の郷に迎え討ち大いに血戦したが、頼希は流れ矢のため討ち死し新方軍は敗北した。八条兵衛尉は新方の庄を合せ領し、向畑城を別府三郎左衛門に守らせる。その頃の栄広山の住僧高賢上人は、頼希の兄であったため八条方に攻められ、難を避けて埼玉郡澁江（岩槻市）に落ちのび、澁江寺の欣誉上人を頼りに年月を送った。

高賢は、出家ながらも新方氏の滅亡を無念に思い、新方の旧臣どもと計り戦備を整え、永正十七年（一一五二）十月、兵を率いて向畑城へ押し寄せせる。城將別府三郎左衛門は、不意をつかれて城兵を多く失い苦戦となり、赤沼勢の援軍来るも力及ばず討ち死し、城方は総崩れとなった。高賢上人は向畑城を奪回し、栄広山に復帰する。

これを聞いて八条兵衛尉は大いに怒り、大軍を武州別府に集め、手分けをきめる。先陣は青柳外記左衛門、小作田半人、柿木小膳八百五十余人、二陣大相模飛騨守、西脇左近右衛門、領家八郎、国分寺藤九郎五百余人、本陣八条兵衛尉一千余人、軍令を司どる。

一方、高賢上人は一山の衆徒、新方譜代の武士、それに澁江の加勢を合わせ一千三百五十余人を従えて大吉村に布陣し、敵の未だに備えていたが、永正十八年正月六日の夜、千間堀、荒川を渡り不意に別府の陣に乱入、火を放って攻めたてれば、八条勢多く討たれて総敗軍となる。この時互曾根に布陣していた八条勢の大曾根上野介は、急ぎ別府へ駆け付け新方勢の背後を衝く。これを見て八条勢は勢いを盛返し、俄かに新方勢は苦戦に陥ったが、大沢辺に来ていた安国、浄恩両寺の衆徒が加勢し大曾根軍を切り返す。新手に攻められ八条勢は総崩れとなり、大將八条兵衛尉は八条指して落ち、小作田半人は身代わりとなって天晴な討ち死を遂げた。この戦いで八条衆の討死七百五十余人、新方衆は三百五十四人という。

高賢上人は勝どきを掲げ、新方氏の旧領を復し、その日討死の亡骸を集めて大念仏を修行した。

これから東新方の地は、栄広山の寺領のようになり、六ヶ村の御堂と称される。

天文年中、北条氏康は武蔵、下総平定のおり、寺号の由緒を尋ねられる。高賢大和尚は「祖先の退転の跡を領している」と答えられた。氏康は諒承して領地安堵の直判を与える。

天正十八庚寅（一五九〇）秋九月、小田原城を落し北条氏を滅亡させた豊臣秀吉は、岩桑の旅館で栄広山の由緒を尋ねられる。上人は先師高賢の先の言葉で答えたが、秀吉は、「出家が兵を用いる事は法意に背く、高賢は新方氏族故理由はあるが、後住に至っては一所懸命の土地とは言えない」として領地を取り上げ、高賢の由緒を残すため、六ヶ村の内に十二石を領することとなる。天正十八庚寅秋吉日

撰者云 武州用土主 藤田新左衛門平信吉

新左衛門八畠山重忠が二男小次郎重康、十五代藤田右衛門重利が嫡子、天文二十二辛丑、北条に属 以下略

時、嘉永四亥年三月清旦

於 武州埼玉郡新方六ヶ村大杉郷 川上 宗甫 写之置

〔川崎神社〕

古くは香取社、（経津主命を祀る）村の鎮守。明治四〇年七月三日、吾妻・稲荷二社・水神社合祀。

参考文献 新編武蔵風土記稿

林 述斎

武蔵国郡村誌

地理索

埼玉大百科事典

埼玉新聞社

越谷市の文化財

越谷市教育委員会

北川崎の虫追い

県指定(伝統)・無形民俗文化財

昭和52年3月23日指定

●越谷市北川崎 北川崎神社(北川崎自治会)

虫追いは厨子村(現地蔵町)の伝説によると、寛政3年(1791)天降大雨で稲に虫がついたが、このとき、厨子村の農民が焚燬をつくなないまつを燃やし、耕地を焼いて歩いたところ虫がなくなったことが、同年の年中行事になったという。したがって、越谷地域の虫追いはこのころからはじめられたとみられている。

近年、都市化が進み農地が少なくなったことから、虫追いは火災予防のための中止された地区が多くなったが、最近まで軒方地区では虫追いを続けてきた。このうち軒方地区北川崎の虫追い行事が県の無形民俗文化財に指定

されたことから、毎年続けられることになった。

行事は、7月24日の夕暮れを待って人が目守の川崎神社に集まり、お神代より焚燬をなげねた火の大小さまざまなないまつに火をともし、延焼火柱を焚いて行列をつくり、「稲の虫ホークホク」と叫びながら農道を行進する。村境の耕地にくると焚え残りのないまつを一つか所に積み、一同手打ちをして焚散するという順序である。昔は手打ちの後、川崎の香取社に集まり、焚燬が執行されて焚散したといわれる。



表紙の写真は、松伏町静栖寺の山門前に
あった松の木、数年前に枯れて今は無い。
(昭和五十七年七月に写す)